

## 思わぬ再会

～宮沢賢治『銀河鉄道の夜』『蝸(さそり)の祈り』から

黒田 裕

奨励者紹介〔くろだ・ゆたか〕

日本聖公会京都聖ステパノ教会牧師

ウイリアムス神学館副館長

十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」そして、「イエスよ、あなたの御国においてになるときには、わたしを思い出してください」と言った。するとイエスは、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。

(ルカによる福音書 23章39—43節)

### 思わぬ「再会」

はじめまして。黒田裕と申します。私は日本聖公会の司祭で、現在は京都・桂にありますが京都聖ステパノ教会の牧師をしております。いま私は「はじめまして」と申しました。確かにこちら同志社大学のチャペル・アワーでお話しさせていただくのは初めてです。しかし、実はこの京田辺キャンパスを訪れるのはこれで2回目となります。といっても前回はもう30年近く前のことです。私は他大学の学生でしたが、当時田辺キャンパスができたばかりで、私の身の回りでもちょっとした話題になっておりました。そこで友人たちとディズニーランドにでも行くような感覚でこのキャンパスを訪れたのでした。そして今回、このようなお話をいただいた時、まず思いましたのは、あの当時全くの物見遊山の気持ちで円形の芝生広場で友人たちとごろんと寝っ転がっていた私が、30年後牧師となってこのチャペルでメッセージを語ってしようとは夢にも思わなかったということです。

人生にはたくさんの再会があり、時に、1度目の出会いの時にはなかったような濃密な出会いが2度目にある、ということがあります。私にとって、そんな思わぬ再会の一つが、宮沢賢治の小説『銀河鉄道の夜』との2度目の出会いでありました。

### 『銀河鉄道の夜』との最初の出会い

数年前に、ある会議に出席するために東京へ出張に行きました。その日の会議は予定よりも随分早く終わりました。帰りの新幹線を早めてもよかったのですが、せっかく東京まで来たのだから、とどこかに寄り道して帰ろうと思いました。そして当時、やはりできたばかりで話題の東京スカイツリーに行くことにしました。300メートルを超える高さの眺めはどんなものかと期待してのことです。しかし、あいにくの曇りです。一応一つ目の展望台まで登りましたが、視界はゼロ。観光客が上がることのできる1番高い二つ目の展

望台は断念しました。

ということで、スカイツリーのほうはとても残念な結果に終わりました。しかし、何気なく入った、併設されているプラネタリウムが予想以上にすごく、これは掘り出し物だ、と嬉しくなり、やはり行ってよかったと思えました。プラネタリウムというものの自体が、一体「前回はいつ」というほど久しぶりでしたが、今回のものは私が知っているプラネタリウムとは似て非なるものでした。確かに星々が天球に映し出され、星座の紹介はあるのですが、むしろドームシアターという方が近いのでしょうか。どちらかと言えば映画を観ているようでした。

もちろんそうした技術もすばらしいのですが、私が「掘り出し物だ」と思えたのはむしろ作品の内容でした。上映時間によっていくつかのタイトルが選べるようになっていきます。私はちょうど時間が合っていたのと、ある関心から、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』をモチーフにした作品を選びました。ある関心というのは、次のような微かな記憶からきています。小学校4年生くらいでしょうか、家の本棚で、ふと、このタイトルが気になって読んでみたのです。と言うのは、その頃、松本零士さんの漫画でアニメにもなった『銀河鉄道999』という作品が大好きだったからです。本当を言うとその『スリーナイン』の原作だと思ったのです。しかし、確かに「銀河鉄道」というアイデアのもとにはなっているようですが、内容は全く異なるものでした。しかも、小学生の私には物語の結末が暗示的な内容だったため、その意味がよく分からないまま終わっていたのでした。そんな記憶がこれを機にふと甦り、どんなストーリーだったのか確かめてみたくなったのです。上映作品では実際そのあらすじがよく分かるものでしたし、賢治の作品世界が見事に映像化されていました。と同時に、原作の本当の結末は明かされていない、という心憎い配慮もありました。

もしかしたら読書好きの方にとっては、今さら『銀河鉄道の夜』か、と思われるかもしれませんが、私にとっては、こういう内容だったのか、と目からウロコが落ちるような思いでした。そのため見終わったあと、その足ですぐに東京駅近くの本屋さんに向かい文庫本を求めました。そして、新幹線までにはまだ時間があったので、喫茶店へ直行し、思わずそこで一気に読んでしまいました。もちろんこの時には結末の意味がよく分かりました。

### 『銀河鉄道の夜』とキリスト教

そもそも今回あらためて知ったのですが、銀河鉄道とは、北十字とも呼ばれる白鳥座から南十字星までを走る天空の列車なのでした。すでにここに暗示されているように、実はこの作品の背骨ともいえるのは、十字架、だったのです。それは、列車の旅の途上で、まばゆいばかりに白く光る大きな十字架が登場し、乗客たちがそれに向かって「ハレルヤ」と言い、十字架に祈る、という場面があることから伺い知ることができます。さらに言えば、この作品は、人間の本当の幸せとは何か、どうしたらみんなが幸いになるか、がテーマとなっており、ヨハネによる福音書の「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」（15章13節）が暗示的に、そのテーマに対応するものになっています。ちなみに主人公の「ジョバンニ」とはイタリア名で、英語ではジョンつまりヨハネですので、この辺りにもヨハネによる福音書とのつながりを思わせるものがあります。なお、後から知ったのですが、この作品の宗教性については、キリスト教の他に法華経の影響も濃厚だそうですので、一応付け加えておきたいと思います。

### 蠅(さそり)の祈り

さて、こうして話し始めると、この作品全体についてもっと語りたくなるのですが、限られた時間の中では無理ですし、そもそも結末を言うわけにも行きません。ぜひ作品そのものをお読みいただければ、と思います。ですので、今日はその時一番印象に残ったところを取りあげたいと思います。

それは、銀河鉄道に途中から乗ってきた女の子が、ジョバンニとその親友カムパネルラに話す蠅(さそり)のお話です。ジョバンニたちが、さそり座の蠅の目にあたる星、赤く光り燃えている蠅の火について話していた時のことです。女の子は、その火が、蠅が焼けて死んで、今でも燃えている、とお父さんから聞いたことを彼らに教えてくれます。するとカムパネルラは言いました。

「蠅って、虫だろう。」

「ええ、蠅は虫よ。だけどいい虫だわ。」

「蠅いい虫じゃないよ。僕博物館でアルコールにつけてあるの見た。尾にこんなかぎがあってそれで螫されると死ぬって先生が云ったよ。」

「そうよ。だけどいい虫だわ、お父さん斯(こ)う云ったのよ。(後略)」

(宮沢賢治『新編 銀河鉄道の夜』新潮社 1989年 210頁)

こう言って、女の子は蠅の物語を話しはじめました。それは、ある野原に蠅がいて、小さな虫やなにかを殺して食べて生きていました。ところがある日イタチに見つかって蠅は食べられそうになります。そして必死に逃げたのですが、井戸の中に落ちてしまいます。そして、どうしてもあがることができず、蠅は溺れはじめます。そのとき蠅は、こうお祈りしたと言います。

ああ、わたしはいままでいくつのものの命をとったかわからない、そしてその私がこんどいたちにとられようとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもとうとうこんなになってしまった。ああなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまっていたちに呉れてやらなかったろう。そしたらいたちも一日生きのびたろうに。どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにおなく命をすてずどうかこの次にはまことのみんなの幸(さいわい)のために私のからだをおつかい下さい(同書211頁)。

そして女の子は最後に言います。

「そしたらいつか蠅はじぶんのからだがまっ赤なうつくしい火になって燃えてよるのやみを照らしているのを見たって。いまでも燃えてるってお父さん仰ったわ。ほんとうにあの火それだわ」(同書211頁)。

### 「蠅の祈り」とわたしたち

ここで私は、このお祈りを祈ったのが他ならぬ蠅であった、というところに大きな意味を見出さざるをえません。多くのものを傷つけ、命を奪い、みんなから忌み嫌われる蠅が、最後にはこのように祈った。

ここに、本日の聖書朗読に出てきたイエスの隣の十字架に架かっていた犯罪人と同質の姿をみるので

す。多くの、あるいは、大きな罪を犯したであろうこの罪人が、最後には「イエスよ、あなたの御国においてになるときは、わたしを思い出してください」、そう語ります。

この祈りと、蝸の祈りは、いつか同じ響きをもって私たちを揺さぶり、私たちの祈りを感化する力をもってしているのではないのでしょうか。もちろん、「この次にはまことのみんなの幸(さいわい)のために私のからだをおつかい下さい」とまでは、なかなか祈ることができないのかもしれませんが。しかし、蝸の虚しさ、そしてあの罪人がもっていたであろう無念は、私たちのもつ虚しさや悲しみ、絶望を刺し貫くのではないのでしょうか。

そんな罪人にイエスは「あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」と語りかけました。私は、実はこの「樂園にいる」の意味が長い間よくわかりませんでした。と言うのは、十字架にかかっているこの犯罪人の置かれている状態は全く樂園とは程遠いからです。樂園どころか、彼の手は釘で打ち付けられており、想像を絶する苦痛・苦悶の中にいるはずです。なのに、なぜイエスは「樂園にいる」と言ったのでしょうか。その秘密は、「わたしと一緒に」という言葉にあります。

この言葉に注目する前に、聖書の語る「幸い」つまり幸福論に触れておきたいと思います。ふつう私たちが日常で理解している幸福感とは、美味しいものを食べたり、裕福であったり、社会的ステータスがあり、苦悩のない状態だといったことを思い浮かべます。しかし、聖書にいう幸福は、そういった状態にあるかどうかとは関係がありません。そうではなく、神と人間との関係を軸に展開します。つまり神がその人と共にいる、それが幸福なのです。旧約聖書でも繰り返し語られますが、インマヌエルつまり「主が共におられる」が、幸いなのです。

### 新たな「思わぬ再会」へ

したがって、イエスがあのように言われた時この犯罪人は、イエスが一緒にいた、主が共にいる、から樂園にいると言っているのです。しかも、いま現在そうだとするだけではありません。この言葉は約束の言葉でもあります。終わりの時にあなたは樂園にいる、という将来を先取りした約束でもあります。ここにおいて、犯罪人である彼の絶望は希望に変わるのです。

そして、その約束とそれによる希望が確かにされたのが、イエスの十字架上の死と復活という出来事でした。

十字架で流されたイエスの血、それは、蝸の火のように真っ赤にうつしく燃え、私たちの罪を燃やし、復活という出来事により決定的に、次なる出会い、終わりの時の再会を、幸いな、希望に満ちた「思わぬ再会」へと変化させます。

その火は、私たちの心を燃やし、私たちの闇と、この世の闇とを照らす光でもあります。そして、その火が放つ光は、絶望を希望に変える、終わりの時の「思わぬ再会」という約束を照らし出しているのではないのでしょうか。